



ニイ「ガタ」、「トキ」、 書いてみませんか？



第四回 酒、酉から戌へ（後編）

新潟県産業労働観光部長（元財務省広報室長） 佐久間 寛道

ニッポニアニッポン

いよいよ、朱鷺の登場です。江戸時代では東アジア一帯に分布、日本でも北海道から九州まで広く生息し、稲を荒らす害鳥とまで思われていました。

しかし、えさ場に適した田んぼと住みかである森林の減少、重宝された肉や羽を得るための乱獲によって数が減少していきました。明治41年には保護鳥となり、昭和9年天然記念物、昭和27年特別天然記念物に指定。ついに日本では能登半島の一部と佐渡に生息するのみとなりました。昭和42年にはトキ保護センターが佐渡に設置。その後も減少は止まらず、野生の繁殖ではなく人工飼育を決断。昭和56年、すべての朱鷺を捕獲し、6羽（雄はミドリ1羽、雌はキンなど5羽）の飼育を開始。しかし、昭和61年にはミドリとキンのみに。ペアリングのため中国から朱鷺を借りたり、ミドリを北京動物園に派遣したりして繁殖に向けた必死の努力が続けられましたが、平成元年には繁殖期（頭から背中にかけて、皮膚の色素の付着により白い羽が黒くなる）でもキンの色が変わらなくなったのに加え、平成7年ついにミドリが死亡。その時点で事実上日本産の朱鷺が絶滅することになりました。ミドリ死亡後、中国からペアで朱鷺の贈呈があり、雛が誕生していましたが、日本産最後の朱鷺、キンは平成15年に36才で死亡しました。

特に人工飼育からのストーリーは、ご記憶の方もいらっしゃると思いますが、最近のちょっとしたエピソードを。昨年の秋、江戸幕府と明治政府の財政を支えた佐渡を体感しなきゃ、という名目で財務省の後輩達と佐渡を訪れ、トキの森公園に立ち寄った際の出来事です。20代の若手達は珍しい動物を見るという観点では目は輝いていたの



（写真）キンの剥製

ですが、ミドリとキンの剥製の前は素通り。そんなものよね、と私は思ったのですが、40代の後輩は、なんで日本挙げて絶滅を避けようとしていたドラマに感動しないんだー、目の前にミドリとキンがいるのに、と若手達を諭し、これが世代の差か、とぼやいてました。そこまで朱鷺に思い入れがあって私としては嬉しかったのですが、やっぱり体験してないことを共感するのって簡単じゃないですね。

脱線しました。平成20年には朱鷺の放鳥を開始するまでに至り、平成28年には人の手を借りない野生生まれ同士のペアから雛が誕生。もともと中国産も日本産の朱鷺も同一の種だそうで、日本産復活と言えるのでしょうか。まだまだ野生で安定、とは言えない状況のようですが、今では自然界に300羽もの朱鷺が生息するまでになっています。運が良ければ、佐渡観光中にみられることもあるそうです。ブラタモリでも、ロケの終わりにタモリさんと近江友里恵アナウンサーが空を羽ばたく朱鷺を見たとのこと。日本海を渡って

本州にくる朱鷺もいるそうです。

ちなみに、学名がニッポニアニッポンだからか、絶滅までのストーリーがドラマティックだったからか、朱鷺が日本の国鳥と言われることが多いのですが、日本の国鳥はキジです。中国の国鳥は決まっていないようです。

朱鷺は、非常にデリケートな生き物で、強い自然保護の取組が大切です。佐渡ではビオトープづくりなど小中学校も含めた取組が行われています。取組の一例として、田んぼに生息し、朱鷺の餌になるドジョウやタニシなどを復活させるため農業・化学肥料を減らす等の内容を満たした「朱鷺と暮らす郷」という認証制度も存在します。結果的に人間にも優しいということで、高価格の人気米となっています。購入者の支払いの一部は佐渡市トキ保護基金に寄付されています。自然保護が産業とウィンウィンになる好例ですね。

廻るコマイヌ！

新潟市中心部にある湊稲荷神社。神社には鳥居と狛犬、がつきものですが、ここの狛犬はなんと廻るんです！ 願懸け高麗犬こまいぬと呼ばれていて、愛しい船乗りが出航できないように、遊女がこの高麗犬を廻して荒天を祈ったといいます。その後、様々な願掛けをする場所となったそうです。拝殿に向かい右側の阿形が男性用、左側の吽形が女性用と一体ずつ存在します。

写真ではそのレアさが伝わらない…と思っていたら、動画がありました！ 結構どっしりしていて、両手で力を込めないと廻りません。是非愛す



(写真) 願懸け高麗犬 (新潟市中央区)

る人のために廻してみてください。

もちろん、稲荷神社なので、お使いの狐の像もあります。この狐の前足には、願い事を書いた紙付きの麻のひもがぐるぐる巻かれています。その昔、夫が浮気相手のところに行かないよう足を縛り願ったのが始まりとか。新潟県の神社の数が日本一だからか、面白い話って様々なところにありますね。

動画： <http://www.niigata-cci.or.jp/kaikou150>

(NGT48×新潟商工会議所新潟開港150周年記念映像の5分経過あたり)

可愛さの伝承

最後に、雪深い山間部での取組を。長野県との県境として位置する妙高市の平丸地区では昭和30年代から、畳表などに使っていたスゲで、農閑期に干支の細工を作ってきたそうです。写真のとおりとても可愛く人気があるのですが、非常に手間がかかり、作り手の高齢化でもうじき製造できなくなると言われていました。また、細々とやっているとは仕方がないのですが、どのデザインも12年に一度しか作らないため、前回の作り方をうまく引き継げない宿命なのが悩みだったそうです。

そんななか、4年前から地元の有志がNPOを作り、伝承する取組を行っているそうです。地域の熱意で伝承する。今も作り手が少なく人気もあるので、届けるのに時間がかかるみたいです。ネットもSNSもある現在、都市部から離れていてもいいものは残る。こうした取組は各地にあります。が、素晴らしいと本当に思います。

ちなみに、雷鳥のスゲ細工も作ったそうです。雷鳥と言えば富山県の立山が有名ですが、新潟県にも生息しているんです。妙高市の火打山には日本の最北、最小の雷鳥の個体群が存在します。近い将来の絶滅が危惧されており、保護増殖の取組が進められています。



(写真) 平丸スゲ細工の
かわいい戌 (妙高市)